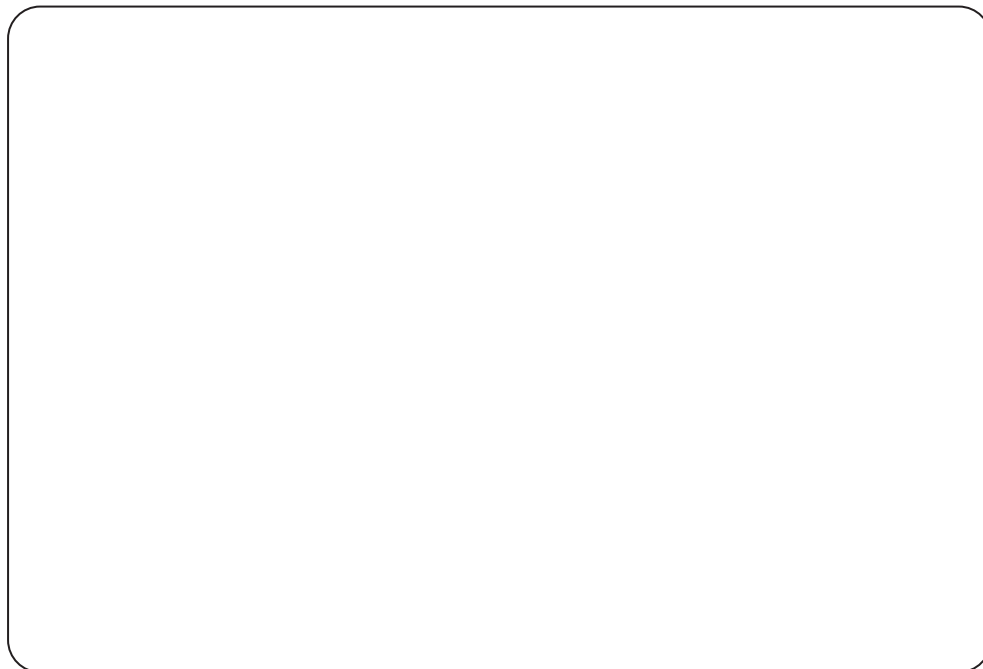




文化庁

Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

メディア芸術連携促進事業
連携共同事業



RCGS
立命館大学ゲーム研究センター
Ritsumeikan Center for Game Studies

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



ゲーム産業生成における
イノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業
EMERGENCE of Industry,
An Oral Historical Research Project focusing on Game Industry

仁井谷正充第 1 回インタビュー前半：数学とコンピュータ

生稲 史彦
井上 明人
鳴原 盛之
山口 翔太郎

Masamitsu Niitani, Oral History (1st, 1): Arithmetic and
Computer

Ikuine, Fumihiko
Inoue, Akito
Shigihara, Morihiro
Yamaguchi, Shotaro

目次

幼少期の生活環境	3
理系科目への興味	17
大学時代：学生運動への参加	26
広島電鉄：労働運動への参加	32
マイコンへの興味	35
コンピューターでゲームを作る	43

幼少期の生活環境

Q：コンパイルは広島じゃないですか、創業。地方から産業を起こされて、あれだけ大きくなって有名になったのって、すごく産業史的に面白いといますか。ずーっと東京だ、大阪だってなるんですけど、地方からどうやって育ってったのかって、すごくお話を聞いてみたいです。

仁井谷：分かりました。

Q：今まで伺ってきたのが東京、大阪の支店、もしくは会社の方っていうのが中心でしたので。広島で見ててどうだったのかとか、そういう状況も含めて。どうしても3月まではこれ1回なんですけど、できれば来年度になって、4月以降にまた続きも伺いたいと思いますけどもいかがでしょうか。

仁井谷：全然。1つご提案でいうと、多分私しか言ってないと思うんですけど、私的にはゲーム理論と文化論みたいな、それもよろしければ聞いていただければと思います。

Q：ゲーム理論といますと？

仁井谷：例えば、エンターテインメントに次元になるっていうのがある。ゼロ次元から今は4次元と考えているんで、そういった話とか。あと、ジャンルのにもいわゆるアクションゲームが1次元、2次元、3次元とかあるんで、そこら辺の話をさしてもらえればとは思って。

Q：面白いです。

仁井谷：それ、多分誰も言ってない話で、私しか考えてない話で、いずれ本にしたいと思ってたんで。今の話もほんとはひっくるめて私の、仁井谷正充の本っていうのを出したいと思ってるんです。その話とほぼ、今日インタビューを受けたのは多分同じ話だと思うんです。

Q：そうですね、われわれ、どっちかというところとそういう理論とか、それとの絡みは実践にたどり着く前のところからできれば伺いたいと。

仁井谷：分かっています。そういうふうに理解しました。

Q：言い方は悪いかもしれませんが、決してそういうのが……。なぜかっていうと、僕の言い方が悪かったんですけど、どうしても一発撮りで聞くと、ハイライトだけ聞いて、そういうすごい人だっということになっちゃうので。

仁井谷：要するにマイヒストリーっていう気持ちだね。

Q：そうですね。

仁井谷：だからさっきも言った、仁井谷本の話とほぼ趣旨は同じ。僕はその本を出したいと思ってるので。今回、自分が作ってるゲームがそこそこ売れたら、その後出したいなあと思ってるので。

Q：そういう意図、もしくは形式でよろしくをお願いします。

仁井谷：最近やっと「自分って何？」が少し見えてきた。本人、そう理解してなかったところがある。やっと、ここ数年、「あ、私ってこう？」みたいなのがちょっと、ちょっと理解しています。ほんとのところはおふくろとかに聞かなきゃいけないんで、まだおふくろも健在なので、チャンスなので、もしよろしければおふくろにも会ってもらえれば僕の過去？ 本人が知らない時代があるんで。0歳児から5～6歳とか、実はほぼ知らないんで。最近、驚くことを1つ聞いたんで。

皆さんご存じかどうか知らないんだけど、赤ちゃんがいますよね。普通、赤ちゃんって赤ちゃん言葉しゃべりますね。「ブーブ」とか「バーバ」とか。僕、一切しゃべらなかつたです。そういう話、聞かれたことがあります？ 僕、ネットで見たら、そういう人が1人見つけましたけども。多分、そこに、僕のDNAがそうなのかな。恐らく、赤ちゃん言葉はしゃべるもんじゃないと、本人が先験的に思ってたんでしょね。だって、大人は大人の言葉使いするじゃない。「自動車」って言ってんの、僕に対して「ブーブ」って言うんだから、「おじさん、それ変」って思ってたんでしょね。だから、僕は赤ちゃん言葉一切しゃべらなかつた。ほとんどしゃべらなくて、ある日突然バーッとしゃべったって。幼稚園ぐらいになってから。だから変な人でしょ？

Q：いえいえ。

仁井谷：何か多分、いわゆる何だっけ。引きこもりというか、何かの病気に近いんだと思いますけどね。

Q：僕もそういうところ、言葉は赤ちゃん言葉があつたらしいですけど、言葉をしゃべるのが遅かつたらしいですから。そういう人はかなりの数いるみたいですけどね。

仁井谷：そうそう。だから、言葉をしゃべるのが遅くて、かつ赤ちゃん言葉一切使わなかつ

た。それは僕、ここ 2~3 年のときにおふくろから聞いたんですよ。「それは何だ」と思ったね。早く言えよと。子どものときに (笑)。何で今更言うんだみたいな。

Q：そういうのありますよね。僕も母親、近くにいますけど、千葉なんで。

仁井谷：多分、彼女にとっては普通だから。

Q：そんな大したことじゃないっていう。

仁井谷：だから、もうそれが日常だったから。で、忘れてたし。ふと思い付いたんでしょうね。お前はちょっと変わってたよと。「ああ、そう。早く言えよ」みたいな。本人はすごいショックでね。何、すごい異常じゃん。そんな赤ちゃん見たら、僕なんか「この子、変」って言うもんね。「病院連れてけ」って言うもんね。僕の場合はそう言う。「この子おかしいから早く連れてけ。知恵遅れかもしれないから」ってね。

Q：まあ、それは。

仁井谷：逆にね。そうそう、そんな感じ。

Q：僕も割とそうです。祖母が心配して連れてったらしいです。

仁井谷：でしょう。そうするとちょっと似てるところがあるんだと思うんですけど。そういったとこね。

Q：恐縮です。そういうちっちゃいころの、それこそそういう、ご記憶のある範囲で。

仁井谷：いや、だから、もうそれは母から聞いた話で、僕の記憶はほぼないですよ。ちっちゃいときはそうでね。一匹狼ですよ。今もそうだけど、ちっちゃいころは一匹狼で、2~3 歳児？ 店のお金盗みつつも (笑)、よくあるじゃないですか。盗みつつも、近所のお子ちゃまたちと 1 対 10 ぐらいで喧嘩してましたね。僕が石投げるから勝つんです。

Q：投げ得ですね。

仁井谷：幼児は普通投げないじゃないですか。

Q：そうですね。

仁井谷：だから肝が据わってるほうが勝つと。だから、当時の写真見ると、僕はもう、どう言ったらいいの、暴力団のボスみたいな顔してますね。

Q：ああ、じゃ、言葉が悪いですが、悪ガキな感じですか。

仁井谷：もちろん悪ガキですよ。

Q：広島の辺りだと結構、何か皆さん、何か負けん気が強いイメージがあつて。

仁井谷：ああ、それとは違う。私の個人の資質だと思いますけどね。

Q：単純に、仁井谷さんご自身の性格的なもの？

仁井谷：でも、よく聞くと、ルーツは間違いなく全部母親なんです。母親がそもそも、子どものときから村の20~30人、男ひっくるめてボスだったんです。多分そのDNAを受け付けてるんだらうと。

Q：ああ、だから気が強いというか、周りに……。

仁井谷：もう、はなっからそうです。だから、幼稚園前後かな、もう毎日、近所中の子ども、バババツと毎日誰でも泣かしてた。で、謝れって来たら、「じゃ、うちの子泣かしてごらん」とか言って母親は言う。「ごめんなさい」言わない人です。ああ、やっぱり勝ち気な女なんだなと。

Q：知り合いのゲーセン店長が広島で仕事していたんですけど、もうね、「お客さんにちょっと注意をつけたら、『なんじゃわれ!』とかって言い返してくるから怖い」って言った(笑)。

仁井谷：いやあ、そんなことないですよ。そんなことない。それは単なる偏見です。どこにいるの、そんな失礼な、今どき。あと、子どものときで覚えてるのは、何だらう。

Q：ちなみに、ご両親はどういったお仕事をされてらっしゃったんですか。

仁井谷：基本的には父は長男、母は長女。しかも母は昔でいう庄屋の娘。だから村では一応名家の1つだったんでしょうね。で、負けん気が強いとかあるじゃないですか。だから、長

男、長女だから、2人とも鼻高だかみたいなのがあった。でも、父親は母親に手なづけられたみたいな、お茶も入れない男、手伝いもしたこともない男が、今は自分で勝手にお茶入れて飲む。ボンボンだったですね、父親は。

Q：村っていうか、農村とかっていうことではなく、もうちょっと都会だったんですか。

仁井谷：村。三原市本庄というところで、そこはほんとにもう、当時は単なる農村だけですよ。だから村ですよ。

そんな親の元で育って。仕事は、おやじはお巡りさんをしてたんですよ。だけど肺結核になって、当時、まだ肺結核の治療方法はなかった時代です、日本では。たまたま、おばあさん方の親戚？ おばあさんのきょうだいハワイにいたんで、そこからペニシリンを送ってもらって、父親は奇跡的に助かったみたいな。けども、肺は3分1。

その間に、お話でいくと、皆さん、だからわれわれの時代のこと、多分あまりご存じないと思うんですけど、われわれの時代は、要するに、日本はみんな貧乏だから。みんな貧乏というのは「火垂るの墓」みたいに、やっぱり親戚中でいじめにあうわけですね。だから、おやじが肺結核で死にそうだから、母親が嫁いびりされるわけなんです。要するに、長男でしょ。おやじが仮に死んだら、おばあさんが持つてる財産はみんな母親に渡っちゃうじゃないですか。それが嫌みたいな、いじめにあってたんです。

だから、僕はよく分かんないけど、昔、縛るとか、子どもを監禁するとかいう。子どもを残して外出するときに、野良に行くときに縛り付けて、そういうような話、聞いたことありません？ それに近い状況だって、母親はそれが「かわいそうだ、かわいそうだ」って言っていたみたい。

Q：あれですよ。いろりとかに落ちないように縛って行く。

仁井谷：ああ、そうそう。そういう感じで、僕はちっちゃいころは育てられたみたい。そこら辺の何か、暗に人嫌いみたいなところが実はあるんで。こうやってしゃべるからそう思われてないけど、ちょっとだけ人を嫌いなところはあるとは思ってるんで。

Q：お父さまは警察官なさっていて、肺結核になられて、その後……。

仁井谷：当然、戻れないからリタイアして、最初は、広島だから広島式のお好み焼き屋さんをやったりとか、それからしばらくして貸本屋やってるんですね。その貸本屋みたいなのが僕のルーツの全て。

だから、当時、私の世代、僕が1950年生まれ、団塊の世代で、要するに貸本屋の一番ピークのころですよ。そこで、あらゆる新刊本が僕の目の前を通っていくわけですね。伝説的

な「ガロ」とか、「日の丸文庫」とかいろいろあったんですけど、そんなのをもう片っ端から全部読みあさってるし、「マガジン」、「サンデー」、それから「サザエさん」とか手塚治虫のいろんなのがありますね。そんなの、もう3~4回読みたおしてるんで、全巻。

だから、当時は大体漫画が極端にいうと、1ページ1秒ぐらいのペースで読みたおすみたい。そこが多分人と全然違うんだよね。しかもボリュームが違うんですよ。そうすると、絵に関する感性も、とことんそこで付いたんやろうという気がしますね。

Q：それは何年ぐらい、お父さんが貸本屋なさってたころって。

仁井谷：小学校のちっちゃいころから。

Q：1950年のお生まれだから、56、7年？

仁井谷：そうだったんです。それは僕に記憶ないんで。それが小学校の低学年のころですね。そのころに実は、低学年のころに僕が囲碁を覚えてるんです。そもそも囲碁を覚えた記憶が残ってないんで、親に聞くと、どうも小学校の低学年みたいなんです。

Q：それで囲碁を覚えちゃった、早いんですね。

仁井谷：だから、囲碁と漫画が僕のルーツになってる。それが、僕がこういうこととか、今作ってる「によきによき」とかにつながってる。そもそもが囲碁・将棋に近いもんだと思ってるんで。今の、特に「によきによき」というゲームが。

Q：この間、Switchでしたっけ？ ダウンロード販売を始めたゲームですね。

仁井谷：そうそう。それが、もう囲碁・将棋に匹敵するゲームだと思ってるんで。だから、僕のルーツがその貸本屋と漫画を、もう多分、僕の世代では多分、僕が一番圧倒的に読んでると思ってるし。1日中店番とかしてますからね。もう片っ端から読むしかないんで。1時間きたら片っ端から単行本ぜんぶ読みあさってるんで。

そうすると、つまるものとつままないものを選択します。おいしいものつまみ食いを覚えちゃう。つままないやつは読まない。つままないやつは、だから1秒に1ページでいく。

Q：もうあと飛ばしって、まあまあねって。

仁井谷：あと飛ばし。でも、ちょっと気になるのはストーリー見ながらっていう。だから、一瞬で絵を判断するっていう技はそこで身に付いたかなあってという気がしますね。

Q：当時、印象に残ってるような面白かったのってどんなのですか。

仁井谷：いや、それはダボハゼだからそういうふうには思わない。どれもこれも、これは面白いと思って。僕は、だからそういうランキング付けないタイプ、そこには。これは面白い、「ガロ」は面白い、「少年ジャンプ」は面白い、何は面白いであって、これが一番面白いっていうふうなランキングは基本的にしない。それはみんなに言われるんですけど、何でもいい。例えば、カラオケとか好きなんだけど、どの曲が十八番、どの曲が一番好き？ っていう。いやあ、そう考えると、私は今、このシチュエーション、今ならこれを歌いたい。このメンバーならこれを歌いたい。この時間ならこれじゃん。このシーズンはこれじゃん、はやるけど、これが一番好きで、これが嫌だとかは言わない。そういうふうに、そもそもが思わないねえ。みんなにいつも聞かれる。「どれが好きです？」、「いや、どれが好きって何で？」って。

Q：そうですね。どうしても僕も、印象に残ってるのはこういうのかなあとかっていうふうにすぐ考えるタイプなので。だから、そういうのもお持ちなのかなあとって。たくさん見られた中で、今でもこれ、覚えてんなあなんて。

仁井谷：たくさん見るから、たくさん見ることが普通で、たくさんある中、序列は決めないと。

Q：はあ。たくさんあり過ぎて、もう。

仁井谷：いや、どれもこれも好きなものは好きで、ただそんなんです。

Q：ちょっと戻るんですが、もともとは三原市の本庄のほうに今。

仁井谷：いやいやいや、それは母親の出で。

Q：ああ、出で。

仁井谷：私が生まれたのはその北の、おやじがお巡りしてて、行ってた……僕も都市名を知らないんだけど、三原市の上の郡があるんですよ。そこの上下というところで生まれた。上下っていう村の名前、あるかないか知らないんだけど。甲奴郡かな、の上下ってところで生まれたいんですけど、僕は生まれて以降行ったことないんで、親に「連れて行け」って言って、連れてってもらえないんで、すげえ悔しいんですけど。自分でも行ってないけど。そこ

で生まれて、すぐ三原に来たわけです。

Q：三原市内のお好み焼き屋さん？

仁井谷：それまでは多分、親の実家において、追い出されて、点々としてみたいですね。

Q：すいません。僕の偏見かもしれない。村だって、やっぱお好み焼き屋さんも、それから貸本屋さんもなくて……。

仁井谷：村じゃなくって、いや、違う、違う、違う。そうじゃなくって、母親は村の出身だけど、僕が育ったのは三原市っていう普通の町なので。

Q：はい、分かりました。三原市の中の。

仁井谷：三原市のいろいろなところを転々としていて。最初は港町かな。港町のおやじの実家で、だけど母親がいびられてるから、おやじが怒って家を出ちゃったわけ、長男だけ。だから、おやじはおばあさんから、代を引き継ぐ権利を放棄したわけ。要するに家出みたいな形なんで。母親は長女だけ結婚してるから、三女に引き継ぐ権利は渡してる。だから2人とも財産ないんですよ。だからピーピー言いながらお好み焼き屋、貸本屋やって育ってきましたね。

Q：ああ、貸本屋。ありがとうございます。貸本屋さんが記憶の1つ、大事な部分、今おっしゃったように。で、少しずつ他に何か、小学校低学年もしくは中学年のころに、何か熱中されたことって、今、囲碁と漫画っておっしゃってたんですけども。

仁井谷：熱中したことは、そういう記憶はほぼない。当時はね。目の前、取りあえず淡々と生きてたんじゃないのかな。趣味があったわけじゃない。目の前に漫画はあるけど、漫画が趣味という意識はない。生活の中に漫画があるだけであって。だから、どっちかというと、学校へ行って、漫画読んで寝る、みたいな。だからこれに熱中するともなくて。当時、テレビもないし。漫画しかないんですよ。だから、漫画読んでればハッピーかどうか知らないけど。

あとは、多分、他の人と違うのは、いつごろか分かんないけども、中学生ぐらいからかな。とにかく音楽が好きになって、日々鼻歌を歌ってただけ。いついかなるときも。というのが、ちょっと他の人とは違うかもしれない。

Q：どういった音楽を歌われる？

仁井谷：売れたものは全て。

Q：売れたもの。ラジオとかで流れてるっていうのを聞き覚えて。

仁井谷：そうそうそう。ベストテンに入ってるものが全てですよね。あんまりレアな曲とかはそもそも歌わない。

Q：ポピュラー性、大衆性。

仁井谷：それから二番煎じは受け付けられない。だから、1つはやって、その次に似たような曲が出たらもう全然。体が受け付けられない。

Q：ああ。漫画のときもそうだったんですか。

仁井谷：漫画もそう。

Q：先ほどの読み方でいうと。

仁井谷：漫画もそうです。そうそう。漫画も、だから売れてる人のパクリ芸って、パクリは絶対見ないね。だから、それはもう絶対、もう無条件ですね。それは感性として受け付けられない。

だから、一番最初の言葉のときからスタートしてるんだと思うんで、だから「ブーブー」って言ったなら駄目なのはそこだと思うのね。だから、本物じゃないっていう意識がDNAにあるんだと思う。それはもう、最近の僕の解釈ですね。

Q：ほんとに新しいものとか、ほんとにいいものとか。

仁井谷：そうそう。要するに、初体験については、何となくみんなそうじゃないですか。初体験がって言って、2番体験はもう。そもそもがあるもんだから、気にも留めない。1番最初のものとにかく食い付く。だから、はやりものにはカッコいいってるんですね。で、2番手は無視するみたいな。そんな感じです。

だから、そこら辺は、とにかく自分の物心ついたときの何で？ っつうのが、そのころは意識してなかったから。最近、そういう理解する。要するに、やっぱり時間がゆったり流れてるんだっていうふうに考えたら、そうかなあって。

Q：差し支えなければですけど、お父さま、お母さまもそういう方なんですか。

仁井谷：そういうふうには考えてないけど、恐らくそうなのでしょう、2人とも。恐らくね。そういう目で見えたことないし、そうしてるかどうかチェックしたことないから知らないけども、多分そうだろうと思いますね。

おやじが言うには、おやじは尾道高校という、今は私学かなあ。当時はどうか知らないけど、そこで本人は首席だったって。2人とも、そこそこ点数取れたんだなあと思うんですけどね。

Q：警察官だしね。

仁井谷：え？ 警察官って賢くないと入れないんですか。

Q：はい、と思いますけど。

仁井谷：当時は？

Q：やっぱり、当時。

仁井谷：今は何か……（笑）。暴走族上がりで入ってんじゃないですか。

Q：いや、まあそうですけど。でも、やはり……。

仁井谷：そうなの？

Q：地域にもよりますけど、うちの田舎ではそうです。うちの田舎ではって嫌ですけど。

仁井谷：そう、特に戦前だから。

Q：そうですよね。

仁井谷：間違いなく軍隊を逃れるために入ってます。彼は。間違いなく。で、責めたら怒られましたからね。本音なんだと思って。「お前、何で軍隊行かなかった」って言ったら、すげえ怒ってました。

Q：うちの、ちょうど祖父がそういう感じなので。うちは、田舎は東北のほうですけど、や

はりあの。そんなシチュエーションじゃないですけど、でもやっぱりそういう感覚ですよ。軍人、警察官、先生っていうのがやっぱり。

仁井谷：そうそうそう。そういう意味で言ったら、倫理とかそういうことにシビアなわけですよ。だからしつけも厳しいんですよ。ただ、そこを逸脱する技を、子どもは今度、それを見つけるんですよ。

Q：そうなんですよ（笑）。今のお話と、最強の子、いじめっ子とか悪ガキっていうのがちょっとパッとこないんですよ。

仁井谷：まあ、それ、根っこにありますよ。根っこに、もうほとんどSですよ（笑）。ほぼS的な行動は大好きです。肉体的じゃなくて、精神的にちょっとずつ追い込むっていうのがすごく好きですね。どうやって追い込めようかって。それも1日、2日じゃなくて、10年がかり、20年がかりで攻め込むのが大好きなんで。時間をかけてねっとりと。包囲網を作って、最後、クチャッっていうのが好きですね。

Q：なるほど。

仁井谷：そのように囲碁・将棋と、囲碁もそうやってやるんです。布石をやって、最後に決着という。

Q：囲碁はまさにそういうゲームですよ。ねえ。

仁井谷：だから、囲碁の戦略性っていうのが、自分の人生のものの考え方の1つのもの組み立て？あるいは、囲碁をやってると、必ず相手が何か打ったときには、「なーぜ？何考えてる？」っていうのが、人の心を読む力というのがそこで結構付いてるかな。他の人よりもちょっと読めるかなあとは思ってるんで。

Q：碁会所とかにも通われたりとかしますか？

仁井谷：それはしてない。

Q：してないですか。

仁井谷：どっちかという、いつも一匹狼。全部、いつもいつも自分1人で、当時はだから……それもお金が、碁会所ってお金があるじゃないですか。

Q：いますね。

仁井谷：基本的に囲碁、なぜやってるか。お金かかんないから囲碁やってたんで。

Q：ああ、そうですか。

仁井谷：だからそういうところ行かないし。だから、一匹狼で、基本におやじと対戦して、中 2 ぐらいでおやじに勝ってから、おやじが対戦してくれなくなった。もう悔しいんでしょうね。

Q：うちは将棋がそれでした。

仁井谷：でしょ？ そしたらこっち、できないですよ。その前に、日本棋院とか入れてくれれば、ひょっとしたら伸びたかもしれない。

Q：プロ棋士ですか。プロ棋士に。

仁井谷：だけど金ないから東京とか出せない。そこら辺もあるでしょうね。そういうの、ちらっと思いましたけど。親は、ただ単に、ちっちゃいときから自分の遊び相手にしたいと思ってて、突き抜けたらプイッと逃げちゃう（笑）

Q：じゃ、まだ中学の段階だと、50 年のお生まれですからまだ……。

仁井谷：62 年か 3 年。

Q：まず、機械に目覚めるのって、例えばトランジスタをいじるようになりましてとかっていうのはいつごろですか。

仁井谷：そういうことは一切してない。金かかるから。だから僕、プラモデルも。そういう男の子が持つ趣味とかは一切ない。だから僕の趣味、多分、勉強、当時。金かかんないの。だって金かかんないでしょ？

Q：そうですね。

仁井谷：だから勉強です。勉強は、大体中学校まではほぼ、中学のときは予習・復習はして

たのか。英文だけ予習してたのかな。あとは、ほとんど勉強しなくても、大体そこそこ点数、皆さんもそうだと思うんだけど。そこそこ点数取れたんで。だから、趣味が多分勉強ですよ。本人はそう思ってないからね。

いつも、特に中学校だったら、クラスの真ん前へ行って、とにかく先生の話聞いて、そのときに頭に刷り込むと、おしまい。算数は、教科書の問題集があるじゃないですか。全部、先生が説明してるときにさっさと全部解いて、「全部終わり」、「おしまい」って。

学校の夏休みの宿題は、大体最初の1週間で全部やると。あとは遊ぶというタイプで。だから、世間で言う、夏休み終わる前に慌てるっていうのはほとんどやってないですからね。

Q：「サザエさん」みたいなもんですね（笑） お魚くわえたみたいな。

仁井谷：ほんとに1週間以内に全部やって、あと、遊び倒す。だから、やっぱり勉強は趣味ですね。それしかない。その後、テレビが出てきたけど、テレビも中学校のとき見たけど、高校のときには、大学行くつもりだったから、ほぼ自分の意思で一切見てない、テレビは。一切でもないけど、要するに勉強する以外は、飯食ってるとき見てたと思うけど、あとは見ない。ただし土日はしっかり遊んでたかな。日曜日かな、よく覚えてないけど。

高校時代は大体3時間ぐらいしか勉強してない。受験勉強はほとんどしてなくて、大学受験の1カ月前かな、1カ月、2カ月前に受験勉強やったと思うんですね。

Q：大学へ行くっていうのは、当時、広島その地域だと結構一般的だったんでしょうか。

仁井谷：いや、それは時代だから、当時、数パーセントでしょう。目の前に広島大学があるから、じゃ、あそこに行こうと思ってたわけだよ。

要するに、中央に行こうと思わなかった。取りあえず目先、目先。だから広島大学の大学に行こうと思っただけで。本当は、どっかで、例えば東京大学に行こうとか思ったほうがいい。世間知らずだから、親がそういうことは言わない。親が言ってたら違うんでしょうね。親もそもそも行ってないから。高卒じゃないですか。で、「大学に行け」という指示がないから、行こうと思わなかったみたいな。

そうそう、全然違う話したら、結構、さっき言った、母親が村一番のボスじゃないですか。ということは、僕と彼女とは多分バトルがあったのね、そういう。どっちが支配するみたいな。そこから解放される闘争を僕はやったんだと思います、恐らく。で、母は多分いろいろ、それは本人に聞かなきゃ分かんないけども、奔放、やりたいようにやらせたのか、言っても言っても聞かないから放置したのか知らないけども、ある日から僕は放置されてましたね。要するに、この子は「こうしろ」って言ってもしない子だと諦めたんだと思う。僕にとってカレー戦争と思うんですよ、僕の中で。

母親が、僕がカレーライスが大好きだから、この子が飽きるように、カレーライス、毎日

作っちゃれと。だから、変な女だと思いませんか？ カレー作って攻めたんだそうです。僕はキャッキョッ言って食べて、本人は飽きちゃって。面白いでしょ？

(一同笑)

Q：作るほうが飽きちゃったんですか。

仁井谷：そうそうそう。だから本人もそこそこ好きなんだと思うんだけど、そんなん気付くよと思いませんか？

Q：そもそもお母さまが根負けしちゃったわけですね。

仁井谷：多分、それと同じことがそれまでもあったんだろうと。いろいろ言っても、だから、言わなくなりましたよね。ああしろ、こうしろ。

Q：言っても聞かない子だと。

仁井谷：うん。ガンと聞かないし。例えば、腹が減っても、「腹が減った」と言わないんだよね。親がじれて飯出すまで、「腹が減った」と言わないっていう意地っ張りなところが。意思は通しますよね。

例えば、目の前に僕の嫌いな、魚の煮付けって嫌いなんですよ。だから食べないんです。父親は、「食べなかったら食べさせなくていい」って言うんだけど、母親は気にして、ちょっと何かふりかけみたいなのかけて、「じゃ、これでもいいから食べろ」とか。それをしぶしぶ食べるみたいなの。いつも親とはそういうバトルをやってました。

Q：ちなみにお一人っ子なんですか。

仁井谷：いや、2人ですよ。兄貴と。

Q：お兄さまですか。伺っていると、要するに、おっしゃるのと実はちょっと違う。要するに、勉強のできる優等生なので、ほっといていいかなっていうふうに親御さん見てたのかなと思うんですけど。

仁井谷：そうそうそう。

Q：そういうご性格もあると思うんですが。

仁井谷：多分そう。しゃべりも、母親に聞いたんでは、幼稚園時代に近所のおじさんと口論して勝っちゃうみたいな、言い負かしちゃうみたいな話聞いて、「あの子は苦手だ」という話、聞いたことあるんで。ああ、そうか、なるほどなって。当時から、幼稚園のころかどうか知らないけども、「この子、弁護士になるんじゃない？」みたいな、近所では言われてたみたいで。要するに、ワーツとしゃべって、大人を理論的に打ち負かすみたいな、ワーツと多分やってたんでしょうね。本人、ほぼ覚えてないですが。

理系科目への興味

Q：大学進学についてお尋ねします。ご出身の学校はどちら？

仁井谷：広島大学の理学部。

Q：理学部。

仁井谷：理学部物性学科です。これが1968年。

Q：その物性学を選ばれた理由とかっていうのは？

仁井谷：それは、実は、ほんとは物理学科に行きたかったんです。当時は、広島大学の場合には、第1志望が物理学科で、第2志望が物性学科としたら、物理学科が落ちても物性学科にオーケーだったら通った。要するに、第2志望で入ったんです。だから物性学科は落第です。

Q：物理？

仁井谷：物理かな。

Q：僕、中学、高校のお話も聞いて、物理を選ばれたっていうのが当時の時代背景で、やっぱ例えばノーベル賞、湯川秀樹、ああいうのが……。

仁井谷：うん、そうそうそう。もうそう、そっち、そっち。

Q：ああ、いいんですか。

仁井谷：「おいら、そうなるべえ」みたいな。

Q：何でしたっけ？ 湯川さんって中間子か、中間子理論か。

仁井谷：そうですね。そこら辺の影響ですよ。「俺ら、ノーベル賞取るべえ！」みたいな。

Q：なるほど。お勉強はどちらのほうが、例えば、よく言われるように社会とか科目でいうと。

仁井谷：もう理数系です。唯一弱いのが国語系。だから、大学受験だと、国語と、特に漢文系がほぼ0点ですよ。だから、算数で90点以上取らなきゃみたいな。多分90点あったと思うんだけど。とにかく駄目でした。英語はそこそこ。物理もそこそこかな。化学もそこそこ。われら、5教科でいった時代なので。

Q：高校時代、どれぐらいからですか？ ちっちゃいころって、少なくとも多くの人にとってはどの分野、科目が好きとかあんまないと思うんですが。

仁井谷：いやいや、もうそのときから何だろう。小学校のときから算数は大好きだったから。

Q：先ほど、率先してっていうか、先生から言われる前に全部解いちゃうみたいな感じだったわけですか。

仁井谷：だから、エピソードでいうと、小学校5年のときに、先生が黒板に書いてると、黒板書いてるときに僕、答え分かるんですよ。そもそも質問の中に答えがあると思ってるから、皆さんもそうでしょ？ 何か分かるじゃないですか。書いてる最中に、「先生、できました」って。先生、怒るんですよ。「まだ俺、書いてる」みたいな。「できた？」

Q：ネタバレすんなっていう。

仁井谷：そうそうそう。それで怒られてました。「お前は早過ぎる」って。

Q：失礼ですが、嫌な子どもですよ。先生からしたら、もう。

仁井谷：そう、嫌な子。

Q：その部分に関しては、少なくとも。

仁井谷：そうそうそう。多分嫌な子だったと思う。

Q：そこに関しては。

仁井谷：でもちょっと自慢してたかもしれない。

Q：だと思います。すごえぞって。書くそばから解いてくって。

仁井谷：そこで母親が自慢になるかどうか分かんないんだけど、知能テストがあるじゃないですか。そうすると、何かちょっとまれに、普通にいない子だぞっていう話を聞いたみたいで。当時、数字は確かかどうか知らないけど、「2000人に1人の知能指数を持つてる」って母親が言ってました。それが本当かどうか私はよく知らないんで。

Q：でも、要するに小学校のころから、少なくとも算数で分かりやすく、よくできる。

仁井谷：算数の場合、自分で計算がどうすれば早く解けるかを、自分で発見してましたよね。例えば、5を掛けるときには、ゼロを付けて2で割れば、そっちのほうが早いじゃんみたいな、いうことは自分で見つけていたし、多分、皆さんもそうだと思うんだけど、因数分解程度だったら、問題文見たら答えが先に出る？ようになりました。えっ、なりませんでした？

Q：そこまでいかなかったです。一応、僕も理系出てるんですけど、そこまでは。

仁井谷：だから、理数系の人でそういう人が結構いますよ。

Q：友達でいます。

仁井谷：でしょ？ 答えが分かるんです。だから、例えば、質問問題でも、質問の中からインスピレーション、答えがピッと分かるんです。そしたら、それが意味、数式を並べていくんです。

Q：はい。

仁井谷：同じことおっしゃったでしょ？ 見えてくるんです。

Q：何で僕、それを覚えてるかっていうと、高校の友達とかやっばりいて、聞くと、「どうして解くの？」って言うと、僕、聞いてから答え考えてるので、答えになる理由を（笑）。

仁井谷：でしょ？ そうそうそう。

Q：そういう人はいました、確かに。

仁井谷：だから、人生の中でも、最初に答えが出ちゃうんです。例えば、「ぷよぷよ通」というタイトルがいいというのが頭で、インスピレーション、ピッと湧くんですね。多分、その成果だと思ってるんで。

Q：なるほど。面白いですね。

仁井谷：その理屈、後から探すんです。何で「ぷよぷよ通」がいいの？ 先に思い付きちゃうんです。「によきによき」というタイトルも、これはもう理屈じゃなく、ただ思い付いて、最近みんなに聞くと「いいじゃん」って。ああ、いいんだというのは後付けで。いわゆる補助線っていうやつですね。補助線って……。

Q：すっところ……。

仁井谷：そう。問題解くときに、みんなが見えないここに線を引くと、答えが見つかりやすいという。数学じゃあるんですけど。要するに、いろんな物理的に、多分、文系でも何でも、そういうのがあるんだと思うんで。そういう補助線を引くのは得意みたいな。そうやって人生を乗り越えてるみたいな。

Q：早い時期からやっぱり気付かれてたし、実践されてたっていうことなんですね、小学校。

仁井谷：そうですね。それと、もっと違う話でいくと、僕がいろんな人に言いたいのは、自分の意識下？ 深層心理のほうに答えを求めちゃうみたいな。例えば、何かいいタイトルを思い付きたいなと、自分でテーマを自分の頭にインプットするんですね。「お前、来週までに自分の作ったプロジェクトにいいタイトルを付けようね」と言ったら、1週間後に思い付くみたいな。その間、何してるかという、自分でいろんな情報を集めて。いわゆる寝たときにいいアイデアを思い付くと似てるんだけど、いつの間にか、1週間やってると答えがどっかでピュッと出てくるんですね。自分で意識して出すんじゃなくて。えっ、そんなの皆さんないです？ そこはちょっと違うのかな。

Q：なかなか、そういうのは……。

仁井谷：だから、自分の意識下の使い方を僕は身に付けてるつもりで。違う話をしたら、例えば、音楽とか、聴く意識じゃなくて、流してると覚えるでしょ？ 例えば、今るとき、僕、昔は音楽流して、それで音楽を記憶するんです。音楽は、記憶しようと、僕してないんで、聴いてるうちに覚えちゃうんでね。意識下を上手に使うというのは身に付けたほうがいいというふうには思ってるんで。何で学校でやらないんだろうと思ったら、多分、学校の先生も使っていないだろうね。

Q：できる人とできない人と……。

仁井谷：できない人が多分、圧倒的に多いと。

Q：できない人しか知らないです。

仁井谷：この話しても皆さんも「ん？」っていうような話でしょ？

Q：できることもあるんですけど、特に歩止まりというか……。

仁井谷：僕は、だから意識的にもうやれるということです。それは。

Q：そうですね。技をいつでも使える人と、ときどき、偶然に使う人とは違うと。

仁井谷：だから僕は、RPG でいうと、やっぱりこれ、マジックだと思ってるので。人生いろいろやるとマジックが身に付きますよ、ということだと思っんです。そのレベルの違いで。そこは教育でほんとは使うべきだとは思っんだよね。鍛えればできるんで。いわゆる、いろんな謎解きあるじゃないですか。それはある程度思い付きますよね、みんな。答えの出し方をね。だから、「あっ、ここら辺が補助線だ」みたいな考え方がいっぱい見つけられるんで、意外性みたいな。そっから見るみたいな。

Q：なるほど。結構数学とそういう謎解きっていうのはかなり。

仁井谷：もうイコール、イコール。あれは数学。数学ってある意味ロジックだから。謎も、枠とこっちの、1次元の枠じゃなくて、2次元、3次元、4次元といういろんな枠から見ないと答え出ない、謎解きって。表面上の1次元で見ちゃいけないんだよ。別の次元から見ないと見えないんですよ。そうすると、もう算数。トポロジーみたいなところがあるんです。

Q：一貫して、ちっちゃいころから、小・中と。

仁井谷：算数を通じて、算数を早く解くための身に付けてるうちに、付いた力。だから、ある意味で予知能力に近いんですよね。そこは身に付いた気がする。要するに、この放物線がどこに行くだろうと読めるわけだから……ということですね。

Q：それがさっき、先生に怒られるように、先生よりも早かったとかね。

仁井谷：そうそうそう。あるいは、子どものときによく言うのは、親の顔色見て、親が何言いそうか分かっちゃうとか、今どう思ってるとか、どうしてほしいか、顔色見たら何となく分かるじゃないですか。口元見たら、何かこう言ってほしいみたいな顔してますよね。皆さん、それは経験してますよね。

Q：はい。

仁井谷：それと同じことが、人生の諸現象の中から読み取っていくみたいな、いうことかなとは思いますがね。

Q：今年の流行語でいうと忖度ですね（笑）。

仁井谷：いや、あれはいい言い方すると、思いやりとか。

Q：そうですね。ほんと、そうです。すいません、わざとそんな言い方して。

仁井谷：いや、いい意味と悪い意味と。忖度は……。

Q：悪いほうですね。

仁井谷：いやいや悪い、90%じゃなく10%が、ああいう私的にやると悪いわけで、庶民のために、国民のためにやる忖度はいいことじゃないですか。

Q：そうですね。

仁井谷：だから、それは単に悪い例が1つあったわけで、全部が全部じゃないと思うんです。そこまで言ったら官僚さんに悪い。彼らは彼らで頑張ってると思うんです。

Q：すいません。

仁井谷：いいえ。一応そこはそういう。だから、そういういつも、よく言われるのは、皆さんもそうかもしれないけど、学校の先生が大嫌いで勉強しないって話、聞くじゃないですか。僕、そうこと考えないんで。好きと嫌いなことと、目の前の勉強しなきゃいけないは別のことなんで。大嫌いな先生でも勉強はちゃんとやると。大好きな先生でも、おいらが勉強したくないやつは全然しないと。だから、倫理とかだったらもう、あっさり算数とか一生懸命勉強しますよね。

だから、人の好き嫌いだったら、好きな感情と嫌いな感情、あるけども、仕事のお付き合いというものは、取りあえずそれなりにするというのは基本なんで。好き嫌いは、基本的に言われても、「うん、好きだけ。で？」みたいな。

Q：機械の出会いもまだまだ。大学の物性のとき？

仁井谷：機械は基本的に、中高時代に機械に出会うんじゃないかと、無条件にコンピューターは使いたいと思いました。

Q：そのコンピューターそのものの……。

仁井谷：算数のつながりで、コンピューターは取りあえず扱いたい。ところが大型コンピューターとかすげえ高いし、目の前にないし、使いたいのに使えねえっていう、そういうこと。だから当時、いわゆる、今の目の前にパソコンあるとするでしょ？ もう1日中やってるでしょうね。24時間やってるでしょうね。

Q：そのコンピューターの存在そのものはどこで知ったんでしょう？

仁井谷：それは世間、いつも。だって、当時からコンピューターのテープの8ビットのやつはおもちゃでありましたからね。

Q：紙テープの？

仁井谷：紙テープは、あれはもう小学校のとき。おもちゃで。

Q：おもちゃであったんですか。

仁井谷：あったんです。それはみんな、それ知ってる。それがほんとにどうか知らないけど、これはコンピューターの磁気テープみたいなもんだ、いうのは何となく知ってたんだよ。

Q：パンチカード？

仁井谷：パンチ？ いや、8ビットでぶち抜いてるテープがずーっとあったんです。それが丸まって、おもちゃの中であったんです。

Q：おもちゃで。コンピューターの写真とかで覚えられてるものって、当時、いつごろ、あんまりもうそんな、ニュースで普通に流れたんですか。

仁井谷：いや、だって新聞ぐらいしか読まないから、新聞に毎日今みたいに、毎日 IT ニュースとかがあるわけじゃないから、ちらっとコンピューターのこと聞く程度じゃないですか。テレビでちらっと見る程度です。

Q：今のお話、もう一回仰っていただけますか。結構、僕、大事だと思うんですけど、計算を早く……。

仁井谷：計算をしたいから、コンピューターが何かできるという知識はどっかで気付くから、それはコンピューターいじりたいと。それはもう算数のつながりだよ。だから、早く計算できる。だから、早く計算できることが大事なんだよ。答えを出すというんじゃないで。

いつも、答えを早く出すというのが癖ですよ。もう、そうしなきゃ我慢できないみたいな。だから、特に女の子と話してると、「答えは？」と言って、女の子にはそれ言っちゃいけないんだよ。「君もつらいのね」って言わなきゃいけないのに、「答えは？」とか言ってる。

「君、こうやったら解決だよ」って言っちゃいけないんだよ。「そう、大変だったね」って言わなきゃいけない。大人になると気付くのね、その癖。

Q：そうですね。計算するための機械って、そうですね。

仁井谷：だから、早く使いたい。でも、大学時代も、使いたいけど何か向こうのほうにいましたよね。どうやったら使えんの？ よく分かんないけど、向こうのほうにいましたよね。大学も7年いたんで。

Q：大学になる前に、何か創作活動とかそういったことは何かやられたりはしたんですか。

仁井谷：それはほぼやってないです。小学時代かな、何か懸賞があつて、ちらっと漫画書いて出して、落選して、それからやる気なくしましたね。センスなかったしね。それまで絵とか書いてないし、けども、一応、いわゆる普通の学科でいうと、ほぼいつも最高点だった

ので。だから、絵とか習字とかは大体クラスでトップなのか、学校でトップなのか、一応賞とかいろいろもらってましたからね。だけど、それを授業中にはやってたけど、授業以外ではやってないから。自主的にやったことはないんで。だから、学校の授業としてやって、ほぼ賞をもらう程度だから、多分、鍛えればだと思うけれど、本人、その気なかったかなと思います。

Q：学校の成績が全部……。

仁井谷：ほぼオール 10。

Q：オール 10？

仁井谷：中学校だとオール 5 ですよ。

Q：そういう意味ではとっても……。

仁井谷：あ、ごめんなさい。体育だけ 3 です。体育と国語が 4 かな。あつちは弱いんで。体は弱いです。懸垂できないって、1 人残されて、「お前やれ！」とかって。あれ、いじめじゃねえのって、今から考えたら。だって、みんなの前で「お前だけできてない。お前やれ！」、それ、いじめですよ、いわゆる。

Q：昭和はそうでしたね。

仁井谷：でしょう？ あと、逆立ちできないとかね。「お前やれ！」とか言って。「できるまでやれ！」、「あれえ」みたいな、やってましたね。だから、ほぼ今だといじめ。

Q：そうですね。今だと親が乗り込んでくるレベルですね。昔はね、普通でしたね。残念ながら。

仁井谷：昔はそれが普通で。だからいつも恥かいてました。

Q：ずっと走ってるとかね。私もやられてましたもん。

仁井谷：そう。体育はもう全然駄目です。

大学時代：学生運動への参加

Q：先ほどの大学7年間というお話ありましたが、その7年間で、3年間分はプラスαでどういったことを何か。

仁井谷：基本的には当時、1968年以降は基本的にみんなで学生運動やってたんで、そっちが忙しいんです。第3の部活が忙しいんで。

Q：いわゆる全共闘とかですか。

仁井谷：そうそうそう。みんな、そこでやってたんで。その分、だから最初1年はまともにやってんですよ。2年目からはもうほんと学園闘争？ でみんながやってて、そっちのほう面白いみたい。だから、アルバイトと学生運動、あとはやってる暇ないよって。そしたら学校行ってないから、そしたらあれ？ もう卒業できない。だから、1プラス6ですよ。2年生をずーっとやってて、何とか2年生クリアして、3年を7年目に行って、3年から4年になれないからやめたみたい、7年目。それが7年目でやめたわけだよ。プラス3じゃないです。1プラス6です。

Q：じゃ、もう1年目だけ授業を真面目に受けて、2年目からは……。

仁井谷：当時はみんな、学校が荒れて、やってなかったんですね。荒れたときに、もうそっちが面白くなってきた。おもしれえと思って。代表者、みんなでつるし上げてね。それがすんげえおもしれえと思って。「何だよ、先生は！」みたい。

Q：広島大学のあれは結構、大学の闘争っていうのはどうでした？

仁井谷：だからもう、中核派の拠点だったんで。もう全然違います。

Q：厳しかったです？ 激しい？

仁井谷：激しいです。

Q：極左活動のまさに。

仁井谷：いや、それ、みんな普通に。極左なんで。みんな当時、日米安保で、1960年代に第1次安保闘争があったじゃないですか。みんな学生のとときに、僕たちは70年に第2次安保やるという意識でみんな育ってるので。頑張ってると思ったら、あれ、なくなっちゃ

ったみたいなの。自動延長とかって何、それみたいなの。その中でベトナム反戦があったから、「そうだべえ」とか言って、みんなでワーッと。

Q：へえ、そんな時代なんですね。

仁井谷：それが普通なんで。で、今、自民党大好きとか、意味分かんないね。お前ら、だって自分たち賛成してさ、明日？ どっか戦争しに行くの分かってんの？ みたいなの。多分、彼ら喜々として行くのかどうか知らないけど。異様な感じですよ。

Q：てっきり、広大に入ったから、そこで何か、物性だからそこで何か機械を学んでいたのかなあと……。

仁井谷：だからもう、全然何もしないですよ。一切してない。機械、そもそも機械好きじゃないんで。これはたまたま。

Q：数学は好きですけど。

仁井谷：だから、これ、機械いじってないけど、完成品は見たけど、組み立てるの大嫌いです。だからプラモデル、一切やってないんだよ。だから、要するにソフトウェアが好きなの。だから絵描きと同じで、絵を描くつもりでプログラムを組んでるわけで。機械はどっちかという、正直嫌い。組み立てるの嫌い。

Q：それからあと、アルバイトってさっきお話がちょっと出てきましたが、どんなアルバイトをされて？

仁井谷：基本的には、当時はもう家庭教師か塾の先生ですね。自分の得意分野でないと。それ以外ないもん。

Q：まさにお勉強。

仁井谷：そうだし、当時は、そもそもアルバイトがないんです。今は普通にあるじゃないですか。当時はそもそもコンビニとかないから、ないんです。

Q：もう、やるとしたらこれぐらいしかないっていう。

仁井谷：そう。家庭教師ぐらいしかない。家庭教師か塾の先生か。

Q：それ、広大だからですよ。

仁井谷：そうそうそう。広大だから。普通の私学じゃできないですよ、当然。

Q：喫茶店とかアルバイトはやらなくても、家庭教師のいいバイトがあるってことですね。広大、広島大学。

仁井谷：ああ、そう。もちろんそう。広島大学ですっていうだけで、そればブランドなので全然違う。

Q：広島だったらそうですよね。

仁井谷：もう、対抗する学校ないんで。今は修道大学がちょっと近付いてんのかな。

Q：いやあ。

仁井谷：違うんですね。

Q：そうでもないと思いますけど。すいません、やっぱり。いや、修道の人知ってますけど。それは広大とはだいぶ違う。

仁井谷：ブランドが違うの？

Q：はい。大学通うためにはどうなさってたんですか。当時、広島はまだ市内だと思うんで、広大は市内だと思うんですけど。

仁井谷：一応、広島で1人暮らしはそこからスタートしましたね。

Q：大学入って、お父さん、お母さんも、「広大だからもう1人暮らし、市内に行くよ」って言ったらどういう感じでしたか。

仁井谷：いやいやもうその気です。だって、通うっていうわけにいかないから。

Q：ですけど、例えば、それこそ「お前は勉強できるかもしれないけど、市内の大学なんか行くな」っていう、「広島の大学なんか、遠くに行くな」っていうことはなかったです

か、お父さんもお母さんも。

仁井谷：いや、もうはなからそんなのはなくて、行くんなら行けて。僕の場合は特別奨学金もらってたから、それもちょっと違うんじゃないのかな。

Q：ああ、ほんとにじゃあ優秀だったんですね。奨学金をもらうっていうのは相当だから取れないと。

仁井谷：それも特別が付くんです。特別の。半分返せばいいやつです。

Q：大学入るときにそう言われるっていうのは、当時でもやはりいい。

仁井谷：お金がないから、親が取れたんで。一応、高校の模試では、あれは……中学のときは学校でほぼ1番とか取ってたけど、高校のとき、そうでもなかったなあ。ちょっと、半分落ちこぼれたけど、まあまあ。取りあえず取れたから、まあまあじゃないですかね。とにかく模試とか強いんです。普通の学校のテストよりも、模試のほうが強い。応用問題、とにかく強いんで。応用問題になればなるほど強くなるんで。要するに、みんなの経験してない問題は僕解くんですよ。

Q：最初に、冒頭におっしゃっていた、二番煎じが嫌いって。多分、フレッシュな問題が出てくると喜んじゃうっていうことですか。

仁井谷：そうそうそう。誰にも解けない問題はさっそうと解く。だから、どんどん一般的な問題になると不得意になってきて。点数が低くなる。

Q：人が解いてない問題、自分が見たことない問題が出てくる模試は……。

仁井谷：そう。誰も解けない問題はもう、すげえ燃えるんで。

Q：今、これだけお話聞いてても、ゲームのゲの字も出てこないっていうのはすごいですね。

仁井谷：ゲームは1982年に会社を作ってから以降ですよ。ええと、いつだっけ。1977年だっけ、成田空港の開港は。

Q：すいません。ちょっと僕、記憶がすぐには思い出せないんですけど、生まれてはいましたけど。

仁井谷：多分、開港は 77 年だと思うんだけど。

Q：もしかして成田闘争ですか、それって。

仁井谷：そうそう。そこで僕、パクられてるんですよ。

Q：ああ、そうなんですか。極左活動やっちゃって。

仁井谷：うん。要するに過激派だったんで。パクられて、げろって、尾道に、実家のほうに戻って、そこで暇だから、当時、今でいうパソコンだけど、当時はマイコンって言ってたんで、その「Apple II が欲しいよ」って言ったら、おやじが、じゃ、勉強になるんなら、50 万円使ってもらって、当時 50 万円かかったんですね。本体とメモリーを買うのに。ほんとに言っときたいんだけど、16K ビットの RAM が 5000 円の時代。5000 円です。それが極端にいうと 64 個いるわけです。で、いくらかかるかでしょ？ だから全部で 50 万円かかるんです。今だったら 2 ギガが 1 万円以下とか、テラだとか訳分かんないんですよ。

Q：そうですよ。もうテラの時代ですもんね。

仁井谷：だから、マイコンの当時のメンバーからしたら、もう「ふざけんなよ！」っていう話でしょ。

Q：今、3TB のハードディスクとか、1 万円とかで買えちゃいますからね。

仁井谷：でしょ？

Q：そうなんですよ。この 40～50 年ころとは全然違って。

仁井谷：だけど、ここ 1 カ月、もう 2 カ月になるのかな。シンギュラリティっていう話聞いてびっくりしました。僕知らなかった。皆さんご存じです、シンギュラリティって。

Q：はい。もう去年。ちょうど 1 年ぐらい前から騒ぎ始めてるんです。

仁井谷：僕は動画で見てびっくりして、じゃ、これは自分のストーリーに頂いていいと思うんだよね。だから、要するに 32 歳、1982 年か。会社を作るまでに、その Apple II を使って会社作るまでの間に、その Apple II で、結局そこで初めてゲームを作ってるんです。あ

るいはインベーダーゲームとかあるから、インベーダーゲームみたいなのを作ってみたい
なとか。

Q：インベーダーは78年だから、ちょうどそのApple IIを買われて、出てきて。

仁井谷：そうそう。その後に、僕がApple II買って、自分でボウリングゲームとか、自分
で「オクトパスフォール」っていう借り物のゲームをパクって、自分なりにアレンジした「オ
クトパスフォール」というゲームを作ったというのをまず自分で作って、パソコンを売る会
社に自分が入って、そこでも現場の子と一緒に「ギャラクシアン」のパクリ？ Apple
II用のゲームを作って、それから孫さんが会社を作って、ソフトバンクの立ち上がりで、全国のいろ
んなソフトを買いあさってた。1タイトル500本っていう契約で。そん中で僕が、多分「オ
クトパスフォール」と「ギャラクシアン」を買ってもらったと思うんだよ。そこから孫さん
と付き合い。だから、孫さんのほうが会社を作ったの、僕より後なんですよ。

Q：日本ソフトバンクのほうが後。

仁井谷：そうです。だから、そういったパソコンの会社でゲームを作ってた、パソコンの会
社の社長さんと何か折り合いが悪いと。折り合いが悪いんで、自分が感じたのは、どうも自
分の上司がいて仕事していると、何かダウンナーというか、やる気に火付けなくなるのね。これ
は、おいらちょっと人に使えるのはあかんのやなど。それまでもいろいろな会社、点々とし
てたんですけども、これ、ひよっとしたら会社でも、会社やるしかないのかな、自分の能力
を生かすにはと思って、取りあえず成功するかどうか分かんないんだけど、会社作っちゃえ
と。

そんなときはゲーム作ろうと思ってないんですよ。ただ単に、コンピューター系の、前、パ
ソコンを売る会社にいたときの仕事を引き継いで、パソコンを教える教室の先生やるとか、
あるいはちょっとソフト作って売るとかの仕事を引き継いだから、それはそれでやってこ
うと思ってたんだけど、なかなかそれで数字上がらないんですよ。

そしたら、パソコン仲間？のほうから、「仁井谷君、こんな仕事があるよ」というのが。
1つはアスキーから、アスキーがMSX出すから200タイトルぐらい買いたいと。1タイト
ル500万円ぐらいで、みたいな話があったんです。その話が舞い込んできた。で、そこから
ゲームを作る。

あるいは、もう一つあったのが、セガさんからゲーム……僕から言わせると、1983年の年
は任天堂がファミコンを、セガさんもコンシューマーを出した年なんです。そのときには自
分の会社ももうできてると。ついてはソフトを作りたいと。どこか作るとこないかなって
いうところで、全国から、全国かどうか知らないけど、取りあえず2社呼ばれたんです。うちの
会社ともう一つの会社。もう一つ会社はシステム系で、結局ゲームを作れなかったんです。

システム系だから、今はシステム系は携帯ゲームとか作って、変なの作ってますけどね。でも当時は作れなかったんです、システム系だったら。

多分、ゲームを経験してないからでしょうね。今はシステム系の方はゲーム経験してるから、そこそこできるんだと思うけども。でも、われわれ、取りあえず仕事は請け負ったんですけど、すごい大事なものは、さっきからあるように、そもそもコンピューターとか適当にいじってるから、そもそも **Apple II** のときにはハンドアSEMBLなんですよ。こんなんですよ。要するに自分で。

Q：自分でアSEMBLしたんですか。

仁井谷：そう。自分でアSEMBLして、自分でコード変換するんです。それしか知らないんですよ。で、仕事やるぞ！と手を挙げたのはいいんだけど、どうやら **CP/M** がいるらしいとか、**CP/M** ってことなんですね。**MS - DOS** の前が、**PC** の主流な **OS** は **CP/M** っていうものだったんです。それをパクってやったのがビル・ゲイツさんなのね。それは置いて。で、**CP/M** と、それからマクロアSEMBラというの知らなくて、え？ マクロアSEMBラって何だよ。使ったら便利いいとかって。だからそこからですよ、機械に触ったのは。でも、ありもんしか触ってなくて。自分で組み立てることはそもそも好きじゃないし、それは人がやるもの。僕はあくまでもソフト屋。だから、どっちかというとなんてソフト屋的な発想ですね。

Q：で、やがてセガさんからお声が掛かったと。

仁井谷：そうです。「**N - SUB**」と「サファリハンティング」がセガさんの、要するにタイトルの1番目と2番目はわれわれが作ったやつです。そこは自慢なんで。だってもう1番って自分しかないじゃないですか。

広島電鉄：労働運動への参加

Q：そっちの話に行く前に、コンパイル以前の話にまず。ちょっと時系列が戻りますが。

仁井谷：どうぞ、いいですよ。

Q：大学を中退されたのが75年で25歳。

仁井谷：75年です。

Q：中退されて以降は……。

仁井谷：まずは広島電鉄に入ってます。広島電鉄に入ったのは、それは大卒を偽って高卒で入って。要するに労働運動しようと。要するに革命ごっこに付き合おうとしてたんで。労働運動やろうということで入ったんですね。それで、75年に入って、3年後に成田で捕まったから自動でリタイアしてるという形ですね。

Q：結構、その中核派の運動には……。

仁井谷：中核派じゃない。僕のは第四インターって。

Q：第四インター。

仁井谷：第四インターってご存じですか。

Q：知りません。

仁井谷：社会党が第二インターなんです。で、第二インターから出ていったのが第三インターで、第三インターが共産党なんです。その共産党から出ていったのが第四インターになるんです。で、第四インターから分かれてるのも本当はいろいろあるんだけど、今、皆さんが大体、著明なのは中核派と革マル派っていうのが第四インターから分かれたグループで、しかもその中核派と革マル派っていうのは日本しかないんです。第四インターというのは全世界にあるんです。だから、第四インターと中核・革マルはほんとは違うんですよ。

Q：インターナショナル？

仁井谷：インターナショナルって、ほんとに。でも、その第四インターも今は1989年後、ベルリンの壁が壊れてからはそれも四分五裂してるみたいで、あれだけ。ほぼ意味がないっていうことですね。インターナショナルの活動はできないっていうことだと思うんで。

Q：当時はインターナショナルな活動として、その中に。

仁井谷：そのグループ、だから、第四インターというグループに入っていました。それが、成田の開港阻止闘争で、半分成功した？ だから、一応延期させたんだから、成功したんだねって話になりますね。そこで捕まっちゃった。

Q：結構リーダー的に活動されてらっしゃったんですか。

仁井谷：いや、リーダーじゃないですよ。ただ単に、1 軍隊の 1 人として突っ込め、はい、突っ込みました、捕まりましたっていうようなもんです。いや、ほんとは陽動隊なんで。他のセクトは知らないけども、とにかく戦争の仕方だと思います。必ず陽動作戦と本隊と分けてやる。そこは第四インターしかしない。他はしない。他はもう、本隊がどーっと行くだけで。ここでかく乱しておいて、こっちでドンって行くのが第四インター。それはうまいんです。だから、開港阻止ができたんです。マンホールにまさか隠れてやると思わないよね。

われわれは陽動部隊だから、全体で正面向かってドーンと行くと、警官がこっちへいっばい来るわけですよ。その間に。

Q：おびきよせといて。

仁井谷：そりゃもう、その前からいろんな作戦で見て知ってるんで。例えば、外務省に突撃するとき、やっぱり陽動隊と本隊と分けて成功させるんですよ。そこはもう何回も知ってたから。第四インター、作戦うまいなあと思って。頭、ちょっといいなあ。みんな、4 大生の人だから、京大、東大のやっぱり優秀な人たちが、演説聞いたらすごいうまいんで。

Q：ずっと広島にしながら、そういうふうな方々と広電にいらしたわけですよ。

仁井谷：広電は、だから広島大学のときに第四インターのリーダーというか、いたから、そこで 12 人から 20 ぐらいのグループがあったので、そこに入ってたんで。

Q：そこに入って、中退されてもその活動を続けて、広電の中でそういうのもやられて。

仁井谷：そうそうそう。要するに、広電入って労働運動をしようと。そしたら成田が、開港阻止があるから行くべえって行ったら捕まっちゃったみたいな話ですね。

Q：そういう意味では、ずーっと、確認ばかりでごめんなさい。広島にずーっといらしたわけですよ。

仁井谷：そうそうそう。1 カ所にずっと。で、会社を作って、結局、プロモーションするには東京と関係あるし、その兼ね合いで途中から広島半分、東京半分と、週単位で動いてました。前半は広島、3 日間。後半は東京という形でやりましたね。

Q：ちなみに、成田闘争で捕まって、その後は広島電鉄をお辞めになられる？

仁井谷：広島電鉄を辞めて、尾道に戻って、尾道の、げろって出てる時には、警察関連の人が社長をやってる会社に半年ぐらい行ったのかな。でも、尾道暮らし、ちょっと息苦しいから家出しちゃえみたいな、広島に家出して、それから広島で別の会社に勤めたのかな。

Q：それが、そのパソコンを扱ってる会社？

仁井谷：いやいや。その前に印刷系の会社に、「取りあえず仕事があるから仕事さして」って言って。多分、それも高卒で入ったんじゃないのかな。そこで今度辞めて、アーバン電子というパソコンの会社に入って。2年ぐらいで点々としてましたね。だから広電に2~3年、それから印刷会社に2年、それからパソコン会社に2年いて、それで1982年、昭和57年にコンパイルという会社を作ったという流れになります。

マイコンへの興味

Q：じゃ、1980年にアーバン電子に入られたと。

仁井谷：そうですね、それぐらいですね。80年か79年かどっちか。80年か、2年だから。

Q：Apple IIが欲しいという話が出てきたのは？

仁井谷：78年に捕まって、尾道に帰ったときに、欲しい。

Q：じゃ、警察関連の人が社長をやってる会社にいるときに……。

仁井谷：に勤めてる間ですね。自分の遊び道具ですよ。

Q：そこはちょっと僕、伺いたかったんですけど、尾道に帰られて、コンピューターが欲しいっていうのがちょっと意外なんですけど。何でコンピューターなのかなっていうのが。Macなのか、Appleなのかなっていうのが。

仁井谷：いやいや、当時TRSとApple IIとPETしかないんで。マイコンというのは。

Q：コンピューターが欲しいっていう、もともとコンピューター、大学入られたときから関心があった？

仁井谷：当時、マイコン出た当時は、みんなマイコン欲しいと思ってたんで。そらもう、それが好きな人はそれしか考えてないですね。無線系の人とか、理系の人は大体もう、マイコ

ン欲しいは普通ですよ。

Q：マイコン。何かばかなこと聞くなって顔されたんですけど、やっぱりそれはもう。

仁井谷：それは、算数系のセンシティブなメンバーはみんなそうじゃないかな。一番初めに食い付いてるんで。それは孫さんのところもひっくるめてそうじゃないかな。彼らも多分マイコン世代だと思うんで。最初に食い付いたメンバー。いわゆる、業界、業界で最先端のテクノロジーを求めるじゃないですか。それはマイコンが最先端だったですよ。

皆さん、今、Apple だったら Apple の iPhone 買うじゃないですか。それと同じだよ。新しいやつ出たら買う。それ、マイコン出たら買う。もうそれだけです。それに一番興味があるんですよ。最先端技術とかですね。数学系にとって。そしたら、それはもう一番欲しいわけです、無条件で。だから、新しい iPhone が出たっていう感覚？ 真っ先に手に取りたいでしょ？

Q：すいません。例えば、Apple II に行く前に、例えばプログラミング電卓だとか何か、もうちょっと。

仁井谷：いや、そんなのかったるいじゃないですか。そういうのは、もうかったるいことはそもそもしたくない。無条件にしたくないんだよ。

Q：でも今おっしゃったように、みんなそういうのもあるんだよと。プログラミング電卓に行かれた方もいますよね。

仁井谷：だからそう。あれは駄目なんです。だから、そういうかったるいのはもう無条件で駄目です。もう、はなからしない。かったるいことは全部嫌。組み立て系が嫌いなんです。あれ、ほぼ僕にとって組み立て系なんで。アセンブル系ですよ。

Q：ちなみに、Apple II が欲しいってなったときに、例えば当時、広島大学とかの理系のご友人とかも結構何人か買われてたとか、そういう状況があったんですか。

仁井谷：それはもう別世界だし、だからずっと一匹狼だから、しかも 7 年いるでしょ。みんな 4 年でいなくなってるから、そもそも友達がいないわけですよ。高校時代の友達も、大学行った途端に、もう三原の友達もほぼ友達じゃないわけですよ。

Q：そうですねえ。

仁井谷：そもそも会話が通じないんで。僕、いろんな人と会話が通じないんです。だからずっと1人で生きてるんで。僕と同じ話をしたい人が横にいないんで。そういう意味では、お友達、ほぼいないです。

Q：節目、節目で大きく変わられてますものね。そうやって三原から広島市内へ。

仁井谷：そうそう。自分の環境が変わるから、友達がゼロからスタートで。今みたくこの話したりしたら、もう受け止める人がいないから、「あんたの話、聞きたくない」という言う人が多いからしないよね。だから友達いないです。

Q：マイコンの情報はどういうふうに分られていたのでしょうか。

仁井谷：それはマイコン誌ですよ。例えば「マイコン BASIC マガジン」とか、「アスキー」とか、「I/O」とかなんで、そこら辺からですね。それは毎号買いあさって、昔は全部そろえてたんだけど、全部消えちゃった。ほんとは全部あったんです。

Q：じゃ、Apple II を買う前に、マイコンの情報誌を読まれてた？

仁井谷：それはもう無条件ですよ。だから、さっき言った、パソコンの会社も、それが普通の書店よりも2~3日早めに入るから、その、2~3日早めに売るということが、お客さんをそもそも呼ぶんですよ。

だから、最初、「アスキー」を10冊売ってたのが、そのうち100冊も200冊にもなる。そんだけ発売日にお客さんが来るわけです。そんだけ売り上げがあがるんで。もう、それが商売だったんで。だから、本を買うのは当たり前です。もう、読んでなかったら、そら、Apple II を買うとかなんないんで。だから、本を買ってる人がApple II を買うんで。買ってない人が買うはあり得ないんで。

Q：いつごろから買ってらしたんですか。そんな雑誌というのは。

仁井谷：それは記憶にないけども。多分、パクられる前から読んでたんじゃないのかな。出たし。当時は大型量販店にパソコン、マイコンを置いてるわけですよ。そしたら、本に書いてあるプログラムをBASICで打ち込んで、「あ、動いた」とかやるんです。それが今は絶対できないけども、当時は触らせてくれたし。現場にいるおっちゃんもそもそも分かんないんで、放置してある。

Q：そうでしたね(笑)。

仁井谷：「訳分かんないなあ」って。

Q：自分もそうやっていじったクチなんで。

仁井谷：でしょう？ だから、店が開く前に、もう4~5人たむろって、「真っ先に俺、あれを作るぞ」とか言って。先に触ったら、もう一日中やってるわけですよ。それが許された時代？ 今は絶対駄目ですよ。もう5分で、「いなくなれ！」って。邪魔とか言って。

Q：そんなことまではないかと（笑）。

仁井谷：冗談です。

Q：でも、広島はどこら辺ですか、そのお店って。

仁井谷：当時、第一家電とか何とか。

Q：第一家電ですか。今どこら辺だろう。

仁井谷：名前はちょっともう、今は違う名前になってるんですね。

Q：何だろう。広島だからデオデオ系ですかね。

仁井谷：ああ、だからデオデオになったんですね。デオデオの前ですね。デオデオの前に第一家電か何か、そういう名前だったの。それも忘れた。

Q：っていうのは、僕、広島、今年たまたま仕事で行ったんで、そのときに確か。

仁井谷：確かにデオデオですよ。今、デオデオの名前、いろんなところに合併して、ベスト電器とかと合併して、デオデオって名前に。

Q：広島の内市の真ん中に……。

仁井谷：真ん中です。

Q：家電量販店あるじゃないですか。ああいうところにいらしたのかなあと。

仁井谷：そう、そこです。

Q：三越とかある辺りですか。

仁井谷：そうそうそうそう。もう広島で大繁華街です。そこです。

Q：あそこに。

仁井谷：一番大きい店だから、一番大きい店、パソコンが一番置いてあるから、当然みんなそこにドンと行っていると、そこはもうみんな仲間ですよ。そこをベースに会社ができるわけです。彼ら、パソコンオタクとゲーセンオタクですね。この2つを基盤にコンパイルっていうのができてるんだよ。その仲間なんです。

Q：それは、すいません。もう一回、僕の聞き方が悪いんだけど、時期的にいうと、それがまだ広電にいらしたところですか。それとももう尾道からあらためて出てきたときにそういう、どちらの状況なんですか。どっちの時期なんですか。

仁井谷：それは多分、パクられる前にもそれはやってたんだと思うね。

Q：広電にいたところに早く始められてた？

仁井谷：そうです。じゃないと Apple II 買うってならないんじゃないですか。

Q：入ってですね。

仁井谷：多分、買いたい、買いたいと思ってて、出てきたときに、お前、要するに、多分親もそれが仕事になると思ったから、要するに、親は投資だと思ったんですね。ここに投資しとけばなるぞと。で、読みどおりですね。おふくろは、「司法書士になれ」と言って、司法書士の勉強の本をドサッと、全部買って来たんですよ。すぐ勝手に買うタイプなんで。で、僕、今度それを無視して。

Q：いやあ、それはすごいですね。

仁井谷：まあ、そういうタイプ。

Q：買ってきちゃうんですか。

仁井谷：全部。小学校でもそうですよ。「自由自在」だとか全部買ってきますよ。そんな親、見たことないです？　すぐ押し付けたりする？

Q：いやあ、想像つかないですね。

仁井谷：で、今度僕は、それを一切無視するんですよ。何回もやって、こんな……。

Q：さっきのカレーじゃないけど。カレーとか煮魚とか。おかしいですね。

仁井谷：いや、本人、大好きだから、煮魚とかイカ、タコとかね。本人の好きなもんを作るんだよ。僕は「嫌いだあ」とか言って。いつもバトルやってました。

Q：さっき、ゲーセンとマイコン仲間ってお話が出てましたけど。

仁井谷：はいはいはい。

Q：じゃ、この第一家電に通ってるころに、ゲーセンのほうにも。

仁井谷：いやいや。だから、そのメンバーが、同じやつがいるわけだよ。

Q：メンバーがゲーセン好きということですか。

仁井谷：ゲーセンをやりつつもパソコンをやるやからがいる。いろんな種類がいるわけだよ。

Q：仁井谷さんご本人は違うと。

仁井谷：僕はちょっとスタンスを置いているんで。

Q：あいつらはゲームしたい、僕はコンピューターを触りたいんだっていう人が同居する場だったということですよ。

仁井谷：いや、1人で両方兼ねてるやつがいるんです。ゲーセン大好きだし、パソコンも好き。普通は分かれてるんですよ。

Q：ゲーセンも、パソコンも好きだしってというのが。

仁井谷：1人で、全部持ってる。

Q：分かれているのが普通なんですね。その辺の状況が分からないので。

仁井谷：1つの趣味をやり遂げるの、大変じゃないですか。知ってます？ ゲーセンオタクは、基本的には自分で、市内に5~6カ所あるんですね、店が。そしたら、私が一番、1等賞だろうって、全部の店に自分の名前を。

Q：ああ、分かりました。ハイスコアボードのランキングを全部塗り替えてくんですね。

仁井谷：それを毎日やってるわけですよ。

Q：分かります、分かります。

仁井谷：そしたらこっち、打ち込んでる時間ない。だから時間の問題だから、無理なんです。

Q：なるほど。要するに、両立ができないっていう。

仁井谷：そうそうそう。

Q：両立不可能な趣味ですね。

仁井谷：多分、両方やってる子は、1つの店で、その子はナムコしかやらない。ナムコの、この店だけやる。だからできるんで。そういうやからが1人おる。

Q：ゲームやるやつはもう、ゲーセン。

仁井谷：ゲーセン。どっちかといえば、それはバカインですよ。算数、バリバリじゃないんですよ。経験主義者なんです。

Q：ゲームはこれが面白いっていうか、これが良かったとか。

仁井谷：パソコン好きはどっちかという、算数オタクなんで。そこは大体両立しないんです。思考が違うんで。

Q：半々ぐらいですか。ゲームオタクのほうが多そうなイメージなんです？ そうでもないですか。

仁井谷：何です？

Q：当時、第一家電の辺りにそうやって集まってくる連中は。

仁井谷：いやいやいや、それはもう、どっちか、算数好きな子だから、当然。そのゲーセン野郎はほとんどいないわけです。だから、10人いたら1人ゲーセン野郎が、それ、要するに半分ゲーセン野郎？ それだけです。ちょっと思考が違うんで。

Q：パソコン好き、マイコン好きな人がそういうふうに、ほんとに集まってきてて。

仁井谷：それはもう算数好きです。クラスで算数はトップクラスだと、学校でトップクラスだと。

Q：変な言い方ですけど、仁井谷さんとお話が合ったんじゃないですか。そうでもないんですか。

仁井谷：うん？ お話？

Q：お話が、要するに算数が好き、数学が好き、コンピューターが好き。

仁井谷：お話じゃなくて、単にグループだから。グループだって、みんなグループじゃなくて、そこに集まってる、単にグループであって、誰も組織してないんで。けども、パソコンを売る会社にみんなが寄ってくるから、そこを今度は僕のほうが。当時、なかなか情報誌がないから、「POPCOM」という、自分で勝手に作った情報誌を作って、最高1000部ぐらい作ったのかな、よく覚えてないけども、通販とかやって、それを2~3年やってましたよ。

Q：個人通販？

仁井谷：「ポピュラーコンピューター」っていう名前の「POPCOM」。その後、有名誌のほうから「POPCOM」が出るんですけども。パクられたっていう。

Q：ああ、そうですね。

仁井谷：文句を言ったんだけど、通じなかったんだよ。むかつきましたけどね。商標取りたかったみたいな。それで全国に知られてたし。あと何だろう。要するに、自分とこでゲーム作って、自分とこでそういう情報誌出してみたところで、パソコンのショップの中ではちょっと有名というか、仁井谷がいるらしいみたいな話はちらっと出てたみたいですね。それくらいだな。それ以上でも何でもなし。それからコンパイル作ったからね。

コンピューターでゲームを作る

Q：先ほどから話が行ったり来たりであれなんですけど、尾道に帰って、お母さまは司法書士の勉強を、司法書士になってほしいなあと思われたのと、仁井谷さんのお考え、ご自身はコンピューターをやりたい。コンピューターを買いたい。

仁井谷：いや、それは、コンピューターやりたいということは通じて、おやじは買ってくれたんでしょね。でも、尾道にいと息苦しいから、水が合っていないんですよ。やっぱり広島に行こうって、プイッと家出しちゃいましたよね。

Q：コンピューター持って。

仁井谷：コンピューターは僕のおもちゃ。唯一のおもちゃです。それで、広島へ出て、広島で真っ先にさっき言った「ボウリングゲーム」と、それから「オクトパスフォール」かな。その2つのゲームを作って。でもゲーム作るときには、燃え尽き症候群なっちゃって、やり遂げたらもうファーツと1~2カ月、やっぱりすごい精神です。基本的に100点じゃなきゃいけないんで。99点じゃ動かないんですね。バグあったらすぐ動かないんで。普通、なかなかそういう仕事ないでしょ？ もう、プログラマーって100点じゃなきゃいけないんで。

Q：エラーが出たら直さなきゃいけない（笑）。

仁井谷：そうそう。普通の仕事は90点でオーケーよ。70点でもオーケーじゃないですか。100点じゃなきゃいけないんで、燃え尽き症候群が起きちゃうんですね。やり遂げたらね、1~2カ月な一んもないっていうやつね。それを経験しましたね。

Q：あと、社名の由来はもうそのまま、コンピューター用語っていうことでよろしいんですか。コンパイルって。

仁井谷：もう一つあるのは、コンパイルっていうのを辞典で調べたら、エディットと同じ意味を見つけたんですね。編集するという意味。じゃ、そのAという仕事、Bという仕事、

C、D という仕事、違う仕事を編集するという意味だよな。そういう、いろんな仕事をやりたいっていうのがあったから。

よく言うんだけど、別にコンピューターやりたいからコンピューターやったんじゃないんで、算数の延長上なので、それ以上じゃないんですよ。コンピューターを使いたいんじゃないんで、答えが早く出したい？ ほんとは、プログラマーはよく言うんだけど、ほんとは楽しみたいんですよ。楽しみたいためにすんげえ苦勞するんですね。何でかよく分かんないんだけど。

Q：損して得取る感じですよ。先に苦勞して、後の処理を楽にする。

仁井谷：そうそうそうそう。だから、今の現状、そういうことかなあと思うんですね。いろいろ苦勞したことが、いろんな成果出して、いろんな仕事につながってきてお金になったりしてるかなあと思う。あるいは、こうやって皆さんにインタビューしてもらってるのはそういうことかなあと思うんですけど。

Q：それで、何か細かいことばっかどうしても聞いちゃうんですけど、コンピューター、計算のためにコンピューター、算数の延長のコンピューターとゲームっていうのはちょっとまだ結び付かないんですけど。

仁井谷：それは、目の前の仕事。だから、いろいろな仕事ある前で、自分はコンパイルっていう会社作って、取りあえずコンピューター絡みをやってるときに、売り上げが上がるんない。そしたら、たまたまアスキーとセガさんの仕事が舞い込んで、ゲームの仕事、たまたまあったわけであって。ゲームがしたい、したい、したいっていうわけじゃなくて、自分の今の持つてる能力でいえば、Apple II は使い道がゲーム作るしかないからゲーム作ったわけであって、取りあえず、じゃ、ゲーム作ろうかみたいな話で。ハイハイハイというわけじゃなくて。仕事ありつこうと思ったら、目の前に自分の適切な、コンピューター絡みの仕事が目の前にあったから、「はい」って手を挙げたぐらいで、大好きとかじゃないです。嫌いではないけども、もう大好き、大好きで、これがあれば人生大丈夫っていうことじゃない。

Q：そういう意味では、コンピューターがお好き。

仁井谷：その前に、言うのを忘れてましたけど、20代は大学に7年行ってたじゃないですか。比較的時間があるんですよ。時間がある半日、12時間ぐらいギター、10年間ぐらい。それはもう、ギターを楽曲入りというか、歌いながらガンガンやってました。当時のアパートだから、多分近所中、2~3軒先まで聞こえてたと思います。全然クレーム、当時は来なかった。今は絶対来ると思うけど。当時、一切来なかった。下で聞こえてたでしょうね。そ

の10年間、12時間ってなかなかないでしょう。

Q：そうですね。

仁井谷：だから、ギターはそこそこ。一応、スタジオミュージシャン程度はできるかもしれないですね。もう指は今は動かないけど、当時はちゃんと動いたんで。

Q：やっぱ音楽って、どうしても広島はロックとかそういうの、フォークとかそういうのっていうので皆さん……関係ないですか。

仁井谷：いや、それは僕、一匹狼だし、そういう組織に入っていないから、それは。プロになりたいなあとは思ってたけど、なるチャンスはなかったです。そこに行っていないから。フォークソング村とかあったんですけど、そこに行っていなくて。そこはやっぱり……何か人の村に行くのはなかなか苦手ですよ。自分でグループ作りたっていう。

Q：何か、当時の雰囲気、やっぱり広島で音楽やるっていう雰囲気が結構あったのかなあって。

仁井谷：その辺はなくて、恐らく、フォークソングのはしりのときに、みんなギターなしで、そこにわれわれも走ったのかな、いう程度ですよ。

Q：僕、あまり自分の話しちゃいけないんですけど、自分の研究でずっとそういうコンテンツとかビジネスとかの研究をやっていて。そういう音楽の産業の話を知ると、まさにその後のフォーク、ロックが広島で盛り上がる、ライブハウスでいろんな、修道大の人たちが来る、ああいう、だからそういう時代雰囲気だったのかなあというのを勝手に思っただけで。

仁井谷：そこには行ってないんですよ。それはもう全国一斉に、フォークソンググループがあったときに、フォークソングやり始めたのはたくさんいると思うんだよ。その流れですよ。

Q：広島だからではなく？

仁井谷：じゃなくて、全国レベル。

Q：全国レベルっていうことですね。ここで一旦切りますか。

仁井谷：はい。

Q：じゃ、一旦。

本内容は文化庁委託事業「平成 29 年度メディア芸術連携促進事業」『ゲーム産業生成におけるイノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業』で実施した内容となります。